Hot Information　Hamamatsu Iwata Shinkin Bank

夢風便り

ゆめかぜだより

Volume 13

特集

世界と繋がる浜松のアーティストたち

三遠南信偉人列伝

「健腸長寿」を追求した乳酸菌シロタ株の父

代田 稔

ザ・サスティナブル・フューチャー

地域を守る防潮森を未来に繋ぐ

夢風便り

ゆめかぜだより

Volume 13

Contents

3 特集
世界と繋がる
浜松のアーティストたち

10 三遠南信偉人列伝
「健腸長寿」を追求した乳酸菌シロタ株の父
代田 稔

14 ザ・サスティナブル・フューチャー
地域を守る防潮森を未来に繋ぐ

18 輝く未来人
浜松市　鈴木美波さん

20 われら夢風カンパニー
File : 25 株式会社鈴木楽器製作所
File : 26 株式会社勝栄

26 まちの映えスポット
旅先の旅館で過ごすような
ひとときの贅沢な体験

29 ぶらり黒猫の街さんぽ
板屋町周辺

32 未来に残したい遠州遺産
ショパンの丘

令和7年6月発行（年2回発行）
発　　行　浜松いわた信用金庫
浜松市中央区元城町114-1
053-401-1812
https://hamamatsu-iwata.jp/
編集・制作　株式会社メディアトーク

特集

世界と繋がる浜松の アーティストたち

国籍や民族が異なる人々が互いの文化を認め合い、地域の中で共に生きる。そんな多文化共生を体現する浜松ゆかりのアーティストたちがいます。浜松を拠点に欧州でも活動する金継ぎ師の圖子愛子さん、日仏にルーツを持つ画家の山田優アントニさん、ブラジル出身・浜松在住のビューティーアーティスト、パウロ・リカルドさん。この3人の「世界と繋がるアート」をご覧下さい。

日本伝統の匠の技で想いを繋ぐ、人を繋ぐ

金継ぎ師

圖子愛子さん

Aiko Zushi

金継ぎ。それは壊れた陶磁器を漆で接着、あるいは形を復元し、金粉で装飾して仕上げる修復技法です。はるか縄文時代に端を発し、室町時代から茶器の修復法として洗練されてきた日本独自の金継ぎは、今や「KINTSUGI」として世界に認められています。

圖子（すし）愛子さんは浜松の自宅にアトリエを構え、依頼された器の修繕を行うとともに、愛好家のための金継ぎ教室を開催。また、年に何回かはイタリアを中心にヨーロッパ各国を回り、現地で金継ぎ文化を広めています。

「私が初めてイタリアを訪れたのは2019年。当時から日本の金継ぎは有名で、自己流でそれを手掛けるイタリア人もいました。ただ、金色の絵具と合成接着剤で器を繋いで『これが金継ぎだ！』と勘違いする人も多かったですね。そういう人たちに本当の金継ぎとは何かを伝えるため、現地で修復依頼を受けたり、教室を開いたりするようになりました」

圖子さんが主催する金継ぎ教室

漆の上に金粉を加飾します

一つひとつ丁寧に時間をかけて仕上げます

ここで圖子さんが金継ぎを始めたきっかけをご紹介しましょう。圖子さんは山梨県北杜市の出身。地元の高校から筑波大学芸術専門学群に進学しました。同大学院で博士前期課程を修了後、東京の小学校で図工教員として６年間勤務しましたが、結婚のため退職することになります。

「私は18歳で一人暮らしを始めた時に、母からティーポットをプレゼントされました。ところが使い始めてすぐに、そのティーポットのふたを割ってしまったんです。捨てるのはもったいないし、安易に接着剤で修理することにも抵抗がありました」

圖子さんは当時から金継ぎという技法があることを知っていましたが、「あれは高価な骨董品を直すためのもの」と思い、長くそのままにしていたといいます。そんな圖子さんは教員を退職した際、「金継ぎを学び、母からもらったティーポットを自分で修繕したい」と思い立ちました。そして、「どこかに金継ぎを教えている人はいないか」と調べたところ、地元の山梨県に古屋容子さんという高名な先生がいることがわかりました。

圖子さんは古屋さんに師事し、朝から晩まで金継ぎを学びます。そして、念願だったティーポットの繕いに挑戦。金粉の代わりに漆で加飾する漆接ぎという手法で見事に蘇らせました。母の想いを漆で「繋いだ」ことが、金継ぎ師としての原点となったのです。

やがて圖子さんは、自動車メーカーに勤める夫の転勤でイタリアのトリノに渡ります。そこで金継ぎ教室を開きつつ、多くの人々から「壊れた思い出の器を金継ぎで直してほしい」という依頼を受けました。「私は依頼主とじっくり話をして、その器が抱いている物語をお聞きします。器を繕うことは、ただ単に形を復元し、傷跡を金で飾るのではありません。器が経てきた時間や物語に心を寄せ、傷跡が器と調和して新たな個性となるよう、一つひとつ丁寧に仕上げていくのです」。

骨董屋の片隅で、壊れたまま放置されていた器。金の加飾と螺鈿のはめ込みによって、星雲のように壮大な景色が生まれました（写真提供：圖子愛子さん）

そうしたイタリアでの滞在を終え、圖子さんは2022年末に帰国。夫の勤務先のある浜松で暮らしながら、今も欧州との「繋がり」を保ち続けています。「私が渡欧するだけでなく、向こうで知り合った若いアーティストたちを浜松に招いて、交流したいと思っています。そこから、何か新しいコラボレーションが生まれることを期待したいですね」。

撮影協力：とんぱ hanare（湖西市新居町）

茨城県取手市の「スタジオ航大」にある山田優アントニさんのアトリエ。「周りは田んぼばかりの田舎ですが、私には心が落ち着くいい場所です」とアントニさんは語ります

何層も積み重ねた絵具の上に描かれた人物。右が母、左が子ども時代の姉

色彩の中から浮かび上がる麗しき人の面影を求めて

画家

山田優アントニさん

Yu Anthony Yamada

「私の父は浜松在住の肖像画家、山田潔。父方の祖父も肖像画家なので、画家として私が三代目になります。また母はフランス出身で、その関係から子どもの頃はたびたび渡仏し、パリのルーヴル美術館やオルセー美術館などを見て回りました。そうした家庭環境なので、物心付くか付かないかの頃から、自然に絵を描いていましたね。後はもう、ひたすら描き続けるというか…。私には姉が一人、妹が４人いますが、全員がそんな感じです」

現在、茨城県取手市のシェアアトリエ「スタジオ航大」で創作活動を行う山田優アントニさんは、自らの画家としての背景をこのように語ります。

小中学校時代は鉛筆画や水彩画に熱中し、浜松学芸高校美術科に進学してから油絵を始めたアントニさん。2006年、愛知県立芸術大学美術学部に入学し、独自のスタイルで人物を描く画法に開眼しました。学部卒業後は大学院に進み、ルネサンス期の古典的な絵画技法や材料を研究しています。

「大学院を出てから一度浜松に戻り、父の肖像画の仕事を手伝ったりしながら、自分の作品づくりに取り組みました。でも『創作環境としてここはベストなのか？』と考えていた時に、大学の同期の友人から現在の取手のシェアアトリエを紹介してもらったんです。こちらには東京芸大取手キャンパスもあり、芸術に対する理解のある地域なので、2017年に思い切って新天地へと引っ越しました」

取手のアトリエには同世代の若い芸術家たちが集まり、彼らの存在がアントニさんに大きな刺激を与えました。また、取手から東京の美術館やギャラリーへは1時間ほどで行くことができ、最先端のアートにアクセスしやすいことも大きな魅力だったといいます。これ以降、アントニさんは東京を中心とした数々の展覧会に作品を出展。また公募展にも挑戦し、2023年に「第26回岡本太郎現代芸術賞」で入選を果たしました。

「2024年には、東京の日本橋三越本店のギャラリーで個展を開くことができました。こちらは、過去に横山大観や藤田嗣治（つぐはる）らの巨匠が展覧会を開催した伝統ある画廊。そこで個展を開けたことは、私にとって大きな経験になりましたね」

アントニさんの作品は、多彩な色の中に人物の肖像が浮かび上がる幻想的なイメージが一番の特色。絵の中で神話やファンタジーが表現されているように見えますが、「何か特定の物語を描いているわけではなく、テーマは曖昧」とアントニさんは言います。

「最初に何を描くかはほとんど決めず、キャンバスに色を無心に重ねていったら、何となくそこに人物の顔が出てくるという感じ、ですね。その人物にも特定のモデルはいませんが、数少ない例外の一つは私の母と、子どもの頃の姉を描いた作品。これは、肖像画家である父の影響かもしれません」

今は取手に腰を据えて創作に取り組むアントニさんですが、「将来は海外に短期移住してみたい」という希望もあります。「母の母国であるフランスや、実は母はフランスとスペインのハーフなので、スペインにも行ってみたいと思っています。そこで何か刺激を受ければ、新しい作風が生まれてくるかもしれません」。アントニさんと世界との「繋がり」は、これからさらに強まっていきそうです。

ビューティーアーティスト

混じり合う心と心 ブラジル、そして日本

パウロ・リカルドさん

Paulo Ricardo

花魁を連想させる日本風の髪型とメイク。胸元のアクセサリーも、パウロさんの自作です

今号特集扉（３ページ）に掲載した黒いドレスの女性。彼女が着ているドレスは、不織布という「織らない」布状の素材を細かく切って折り紙のように加工し、重ね合わせたものです。また、メイクとヘアスタイルはどこか日本風。モデルはブラジル人女性ですが、歌舞伎や時代劇に出てくる花魁（おいらん）のような艶やかさを漂わせています。

「これらの作品のテーマは、ずばり“日本”です。ドレスは日本の折り紙の応用で、メイクとヘアスタイルは昔の日本人女性をイメージしました。髪に板状のものを差しているのがわかりますか？これは刀です（笑）」。そう言って悪戯っぽく微笑むのは、ドレスの作者でメイクも担当した日系ブラジル人四世のビューティーアーティスト、パウロ・リカルドさんです。

パウロさんは、ブラジル南部のパラナ州クリチバの出身。両親はともに日本とブラジルのハーフで、パウロさんは日系クオーターになります。５歳の時、両親、兄の家族４人で日本に移住し、長野市松代町に住みました。松代は、江戸時代に真田幸村の兄、信之が治めた旧城下町。ブラジルとの環境の違いはあまりにも大きく、パウロさんたちはとても苦労したといいます。

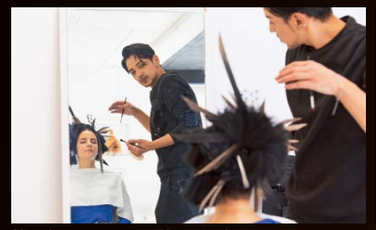
「とくに苦労したのは、やはり言葉の問題。当時、僕はポルトガル語しか話せず、入学したのは普通の小学校だったので、授業が全くわかりませんでした。でも、僕が13歳の時に両親が転勤となり、家族で磐田市に移住。地元の向陽中学校に入りました。磐田には、僕と同じような境遇の子どもたちがたくさんいて、その子たちと友だちになれました。そこでみんなとポルトガル語交じりの日本語で会話し、日本のこともブラジルのこともきちんと学べるようになりましたね」

中学校を卒業したパウロさんは、工場で働きながらヒューマンアカデミー浜松校でヘアメイクを学びます。幼い頃からファッションや美容の世界に強く憧れ、「あのキラキラした世界で活躍したい」という願いがあったからです。ヒューマンアカデミーでメイク、ヘアメイクの資格を取り、パウロさんはビューティーアーティストへの道を歩み始めました。

「2014年には、ブラジルで開催されたサッカーワールドカップにヘアメイクアーティストとして参加。その後は名古屋のカメラマン・モデル事務所に入って、写真やメイクの技術をプロの現場で習得。東京や大阪に派遣されて、広告、雑誌、イベントでのメイク、ヘアメイクなどに携わりました」

この事務所で２年半修業した後、パウロさんは豊橋の美容室に転職。美容室が経営する専門学校でヘアメイク講師を務めつつ、裁縫も独学で習得します。こうして多彩な経験を積んだパウロさんは2023年に独立、浜松を拠点にビューティーアーティストとして活躍するようになりました。そんなパウロさんの創作の背景には、日本とブラジルの文化への愛情があります。

「僕は日本の神社が大好き。名古屋の熱田神宮や掛川の事任八幡宮（ことのままはちまんぐう）、磐田の見付天神などによくお参りします。折り紙のドレスなども、神社に代表される日本文化へのリスペクトから生まれました。その一方で、僕はブラジルのサンバも大好き！明るくてエネルギッシュなブラジルの文化は、僕の大切な宝物ですね」。日本、ブラジルという「二つの祖国」への愛は、これからもパウロさんに様々なインスピレーションを与え続けるでしょう。



鏡に向かってメイクと髪型を入念にチェック

目元にアクセントを入れるパウロさん

見事な仕上がりに、モデルさんも大満足の笑顔です